

長岡宮「東宮」^{ひがしみや} 内裏外郭南面築地の調査

所 在 京都府向日市鷄冠井町東井戸64-2 ほか 調査期間 2017 (平成 29) 年 7 月 14 日～9 月 22 日 (予定)
調査所管 向日市教育委員会 調査機関 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター (担当 中塚良・梅本康広)

1 はじめに

長岡京の内裏 天皇の居所である内裏は長岡京においては 10 年の間に二度の移転が行われ、3 箇所³に造営されていました。文献史料によれば桓武天皇は延暦 8 (789) 年 2 月 27 日、「西宮」より「東宮」に遷御し(『続日本紀』)、延暦 12 (793) 年 1 月 21 日、宮を解体するために「東院」へ遷御した(『日本紀略』)と伝えられています。現在までに発掘調査で確定している内裏は「東宮」と「東院」であり、「西宮」の所在については、向陽小学校付近が有力視されています。

「東宮」の調査成果 第二次内裏である「東宮」は昭和 41 (1966) 年に発見され、これまでに 34 次³⁴に及ぶ調査が行われています。築地回廊^{つじかいろう}で囲まれた内郭は一辺約 159m 四方の規模を有します。平城宮では東西 178m、南北 187m、後期難波宮が東西 179m (南北値不明)、平安宮では東西約 170m、南北 280m ですから、他の都城と比べると長岡宮「東宮」は正方形を呈してやや規模が小さかったとみられます。内部からは正殿をはじめ檜皮もしくは板葺きの掘立柱建物が 9 棟、掘立柱塀 1 条などが確認されています。平安宮「紫宸殿」^{ししんでん}に相当する正殿は身舎の規模が桁行 9 間、梁間 3 間で、四面には廂を設けますが各面の隅を欠く構造となっています。正殿の北側には天皇の後宮が展開していたと考えられておりそこで確認された 5 棟の建物配置には桓武天皇が即位後 2 年半を居所とした平城宮内裏から引き継ぎ平安宮内裏へとつながる新旧ふたつの要素が備わっており、内裏構造の漸移的变化を窺うことができます。また、正殿地区の調査では平安宮の「春興殿」^{しゅんこうでん}にあたる東第二脇殿が確認され、基壇縁石の抜取跡からは甲冑の鉄製小札が約 30 点出土しています。これらの中には、古墳時代後期から奈良時代までの古い甲冑が含まれ、ヤマト王権以来の天皇権力を象徴する武具がこの建物の内部に保管されていたことを示しており、平安宮「春興殿」の機能が長岡宮にさかのぼって確認できることを明らかにしました。

今回の調査 調査地は内裏「東宮」の南西部にあたり、築地回廊及び外郭築地の想定位置に調査区を設けて両施設の遺存状況、規模や構造を明らかにし、内裏外郭の復原に取り組みました。

2 調査の成果

基本層序 調査地に遺存する堆積土の層序は、表土 (第 1 層) 以下 4 層に区分されます。第 2 層は褐灰色土で近世 (18 世紀以降) の遺物包含層、第 3 層は暗褐～黄褐色土を基調とし二層に細分でき上層 (第 3a 層: 暗褐～橙褐色土) は長岡京期遺構の切り崩しもしくは埋め立て層、下層 (第 3b 層: 黄褐～黒褐色土) は長岡京期の遺構構築層になります。第 4 層は黄灰色系シルトで低位段丘層 (約 3 万年以前の基盤層) にあたります。

検出遺構 調査区は内裏外郭の南面築地を確認するために設けた第 1 トレンチと、内郭築地回廊の確認のための第 2 トレンチからなります。両トレンチは高低差約 0.5～1.0m あり、内郭側が低くなっています。第 1 トレンチ中央は京都府教育委員会が 1974 年に実施したトレンチが重なります。

A. 第1トレンチ

〔1〕近世

北から順に溝SD52108・09・10、土壙状SX52111が確認されました。トレンチ北部では南北溝SD52109が埋め立てられた後、東西向きのSD52108が開削、埋め立て、再掘削の過程を経ます。後者には軟質の燻瓦が多量に始末されています。近世真経寺の活動の痕跡と推察されます。

〔2〕長岡京期

調査区北から順に溝SD52116・15・13・17、外郭築地SA52114、瓦類埋置遺構SX52112をさらに、下位で溝SD52119を検出しました。まず、築地に関わる遺構から紹介いたします。

〔外郭築地SA52114〕 築地本体は後世に削られ消失しています。その基底部分が東西幅6mにわたり検出されました。この基底部分も改変を受けているために本来の形状ははっきりとしません。黄灰色系の構築土が厚さ約0.8mで積層します。構築時に掘り込みを伴い、下面は浅い船底状をなします。築地構成土の凸形の中軸位置および後述する南北二条の雨落ち溝の二等分位置が、内裏「東宮」中心の南約400尺、南面築地回廊の中心からは約39m（約130尺）に相当します。

〔瓦類埋置遺構SX52112・南雨落ち溝SD52119〕 トレンチ南端からは軒丸瓦を主体とする瓦の集積が見つかりました。完形かそれに近い軒丸瓦8点（蓮弁文軒丸瓦、平城宮式）、軒平瓦2点（唐草文、平城宮式）が目を引きます。築地所用瓦類と推測されます。南雨落ち溝SD52119上位の整地土上面に築地の向きに併行して置き並べられ、第3a層（築地遺構上位を覆う推定壁材切り崩し層準）で丁寧に埋め立てられています。これらの瓦群が配置されたまさに下位が、南雨落ち溝の底にあたります。

〔北雨落ち溝SD52117〕 溝SD52113直下、第3b層系の遺構です。大形の掘方（SD52113b。台形断面、幅2.15m、深さ0.40m）と南端に沿う小形溝52113aで構成されます。後者は埋め立て単位の可能性も考えられます。京都府トレンチ溝CはSD52113b北肩の一部をとらえたものと推定されます。溝SD52115・19と20尺等間隔の配置です。

〔溝SD52113〕 前述の溝SD52117のほぼ直上、長岡京期第3a層準に設けられる幅の広い浅目の溝です。台形断面、幅1.7m、深さ0.2mです。砂っぽい構成層（下層が礫質、上層で砂質に移行。水の動きの影響か）にかなり多量の炭片、土師器・瓦片を含みます。軟質・淡彩の緑釉陶器（大形品）も伴います。ピットP1～P3とともに、層位から築地の切り崩し以降の遺構と推定されます。

〔溝SD52116〕 西北西に走る小形の溝です。外郭最下部の整地層（近世層に切られてごく薄く遺存する褐灰色系炭混じり土）が埋土です。幅0.4mと小形です。造営時の排水溝の可能性がありそうです。

〔溝SD52115〕 整地土下部層準に構築される浅い台形断面の溝です。幅0.80m、深さ0.12m、砂が流入した後、残りの凹みが整地土で埋め立てられます。京都府トレンチの東西溝Bに相当します。

B. 第2トレンチ

〔1〕近世

北から池状遺構SX52101、溝SD52106・04・05、礫・炭敷遺構SX52107があります。これらは遺構の構造から浅層地下水を下げたり防湿効果をねらう痕跡と推察されます。後述の築地回廊雨落ち溝に重複するSD52104は椀形断面、深さ0.4m、透水性をもとめて燻瓦碎片を含む礫材で充填されます。

〔2〕長岡京期

北から順に、瓦埋設遺構SX52103、内郭南面築地回廊雨落ち溝SD52102を確認しました。

〔築地回廊北雨落ち溝SD52102〕 深い椀形を呈する素掘り溝で二段に落ち幅1.65m、深さ0.60mの規模です。溝の北肩が後述のSX52103構成層で覆われるのに対し、南肩は溝の埋土と第4層（段丘

層)が直に接します。溝の南約2.2m(7.5尺)が回廊礎石推定位置ですが、長岡京期の第3層系がほぼ後世に切り土されています。南面築地回廊推定中心位置との距離20.5尺(7.5尺+13尺)と精度の高い施工がうかがえます。

〔瓦埋設遺構 S X 52103〕 黄褐色系整地土(第3b層準)と平瓦主体の瓦碎片が互層状に分布しています。南北約3m範囲で平面的に検出しましたが、北端は前述 S X 52101 掘方に切られ北向きでの範囲は現状では不明です。その南端の一部は北雨落ち溝の内部に及ぶ可能性があります。

3 調査の意義

① 内裏外郭の存在を明らかにし、その南面築地の規模と配置場所が判明した

内裏は築地回廊と築地で二重に囲われ、築地回廊の内部を内郭、築地までの敷地を外郭とよびます。長岡宮でもこのような配置構造がとられていたと考えられてきましたが、確実な外郭築地の遺構は未確認でした。今回の調査で宮城大垣に相当する規模の築地遺構を確認することができ、ようやく外郭の南辺をおさえることができました。

外郭築地の本体は基底幅を2.1m(7尺)に想定することが可能であり、朝堂院築地が1.5m(5尺)、宮城西面大垣や朝堂院南面区画が2.1m(7尺)であることから、長岡宮では最大規模にあたります。

外郭の南辺を把握できたことで、築地回廊で囲まれた内裏内郭の南側に、南外郭とよぶべき南北約40m規模の空間を復原できるようになりました。

平安宮の南外郭は約30mと考えられており、長岡宮の段階ではもう少し広く設けられていたこととなります。この空間には内裏を維持、運営する施設が備わっていたと考えられます。

② 平安宮内裏の配置構造の原形が長岡宮で成立していたことを明らかにした

内裏外郭(いわゆる「中重」)の範囲については、平安宮では内裏内郭、中和院、内膳司・采女司、蘭林坊、桂芳坊、華芳坊を取り囲む全域と考えられています。外郭の守衛には「兵衛」があたっており、外郭東面にひらく「建春門」は左衛門府の官人の詰所(「左衛門陣」)、西面にひらく「宜秋門」には右衛門府の詰所(「右衛門陣」)が設けられていました。

長岡宮の造営に際し、内裏は大極殿と朝堂院を軸にして東西二箇所へ分離独立した形で配置されます。平城宮までのように内裏外郭から大極殿、もしくはそれに準じた建物が外され、宮廷を司る役所などが配置されていきます。今回の調査で大垣規模の築地遺構が見つかったことにより、平安宮と近似した二重構造の内裏が長岡宮段階ですでに形成されていたと考えることができるようになりました。

③ 長岡宮の内裏外郭の範囲については、従来よりも広がったことがわかった

平成8(1996)年に実施された宮第331次調査では、西面築地回廊の中心から西へ15.18m(約51尺)離れた位置でこの回廊と並走する南北築地の痕跡が確認され、内裏外郭の西面築地である可能性が想定されました。しかし、その築地基底幅は1.2m(4尺)であったことから、内裏外郭の築地としては規模が小さく、今回確認された大垣規模の築地が外郭の四周をめぐる必要があります。

なお、外郭西側については崖状の斜面地形を抱えるため、地形に即した現実的な対応がはかられたとみなせば、平安宮のように矩形を呈していなかった可能性があります。

近年、長岡宮の発掘調査では、朝堂院正面に備わる楼阁建物「翔鸞楼」、内裏正殿地区の「春興殿」相当建物、内裏「東院」正殿一郭の建物配置など、平安宮で確立したと考えられる要素が長岡宮で確認される事例が増えてきました。今回、内裏外郭を囲む築地が確認されたことで、内裏の配置構造についてもその原形が長岡宮で成立していたことを明らかにすることができたのではないかと考えています。

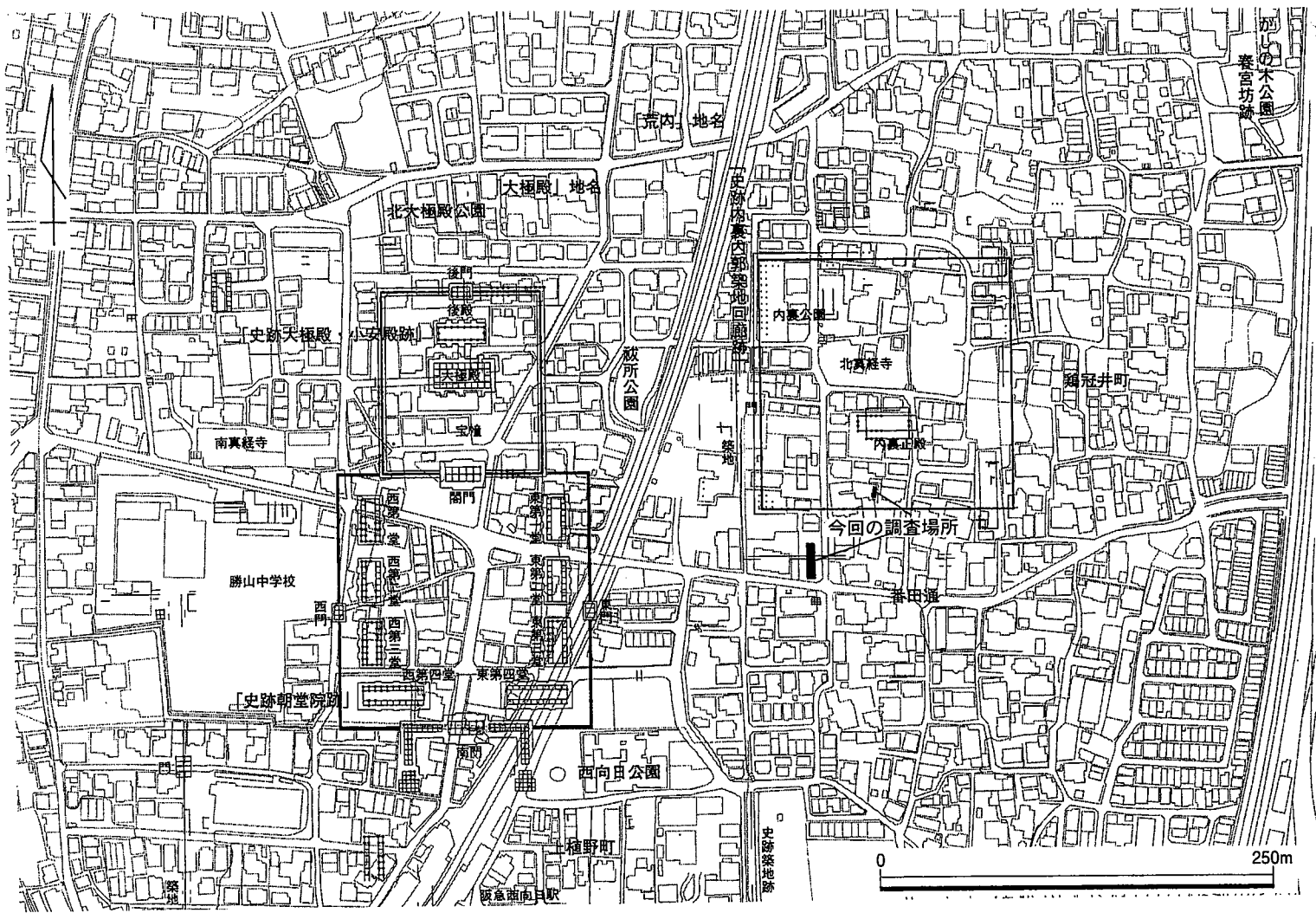


図1 調査地位置図

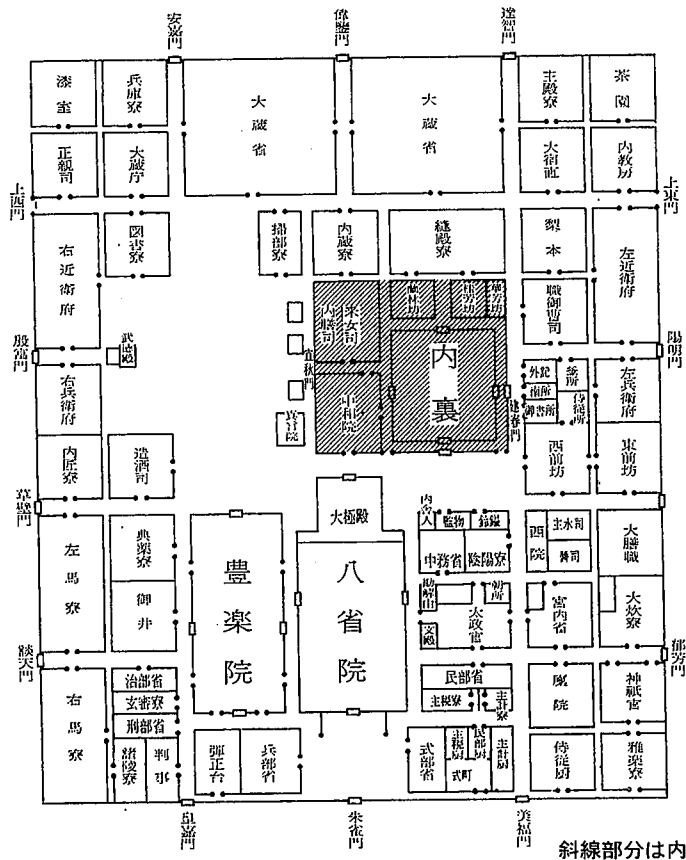


図2 平安宮復原図と内裏外郭の範囲
(奈良国立文化財研究所 1976)

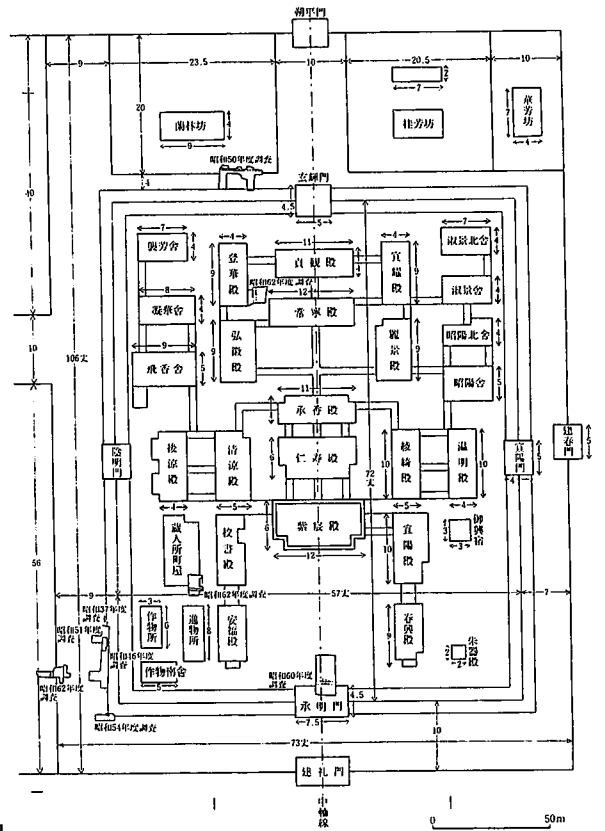


図3 平安宮内裏復原図
(財) 古代学研究所 1994)

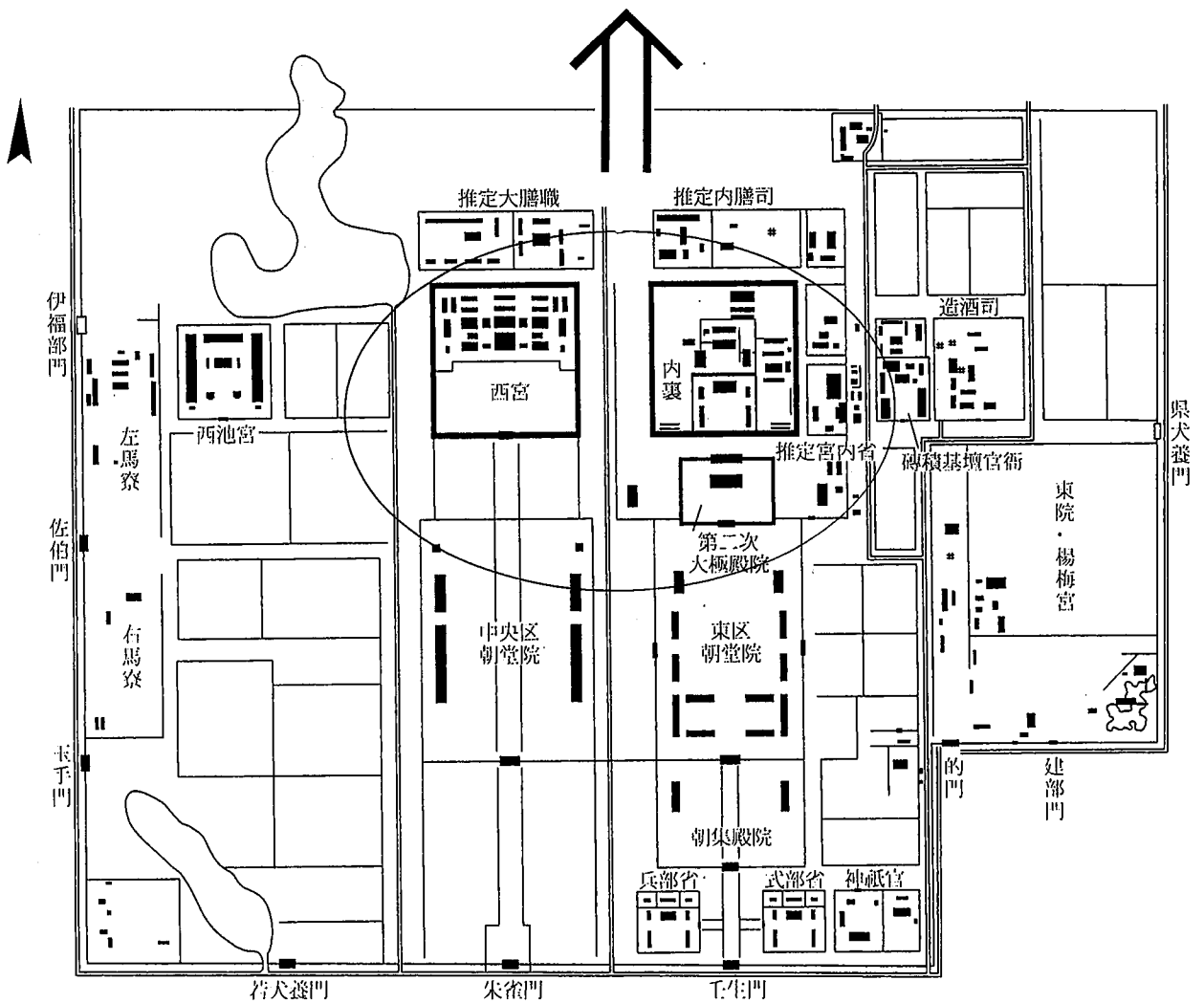
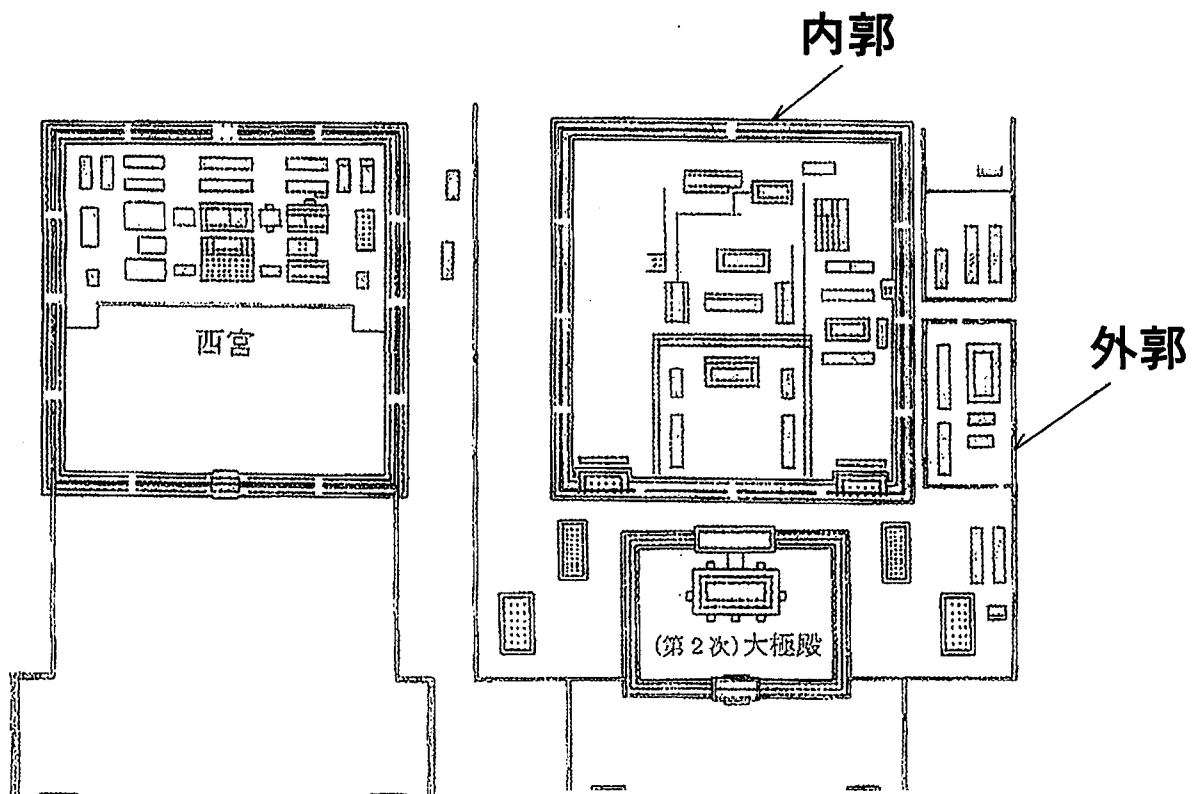
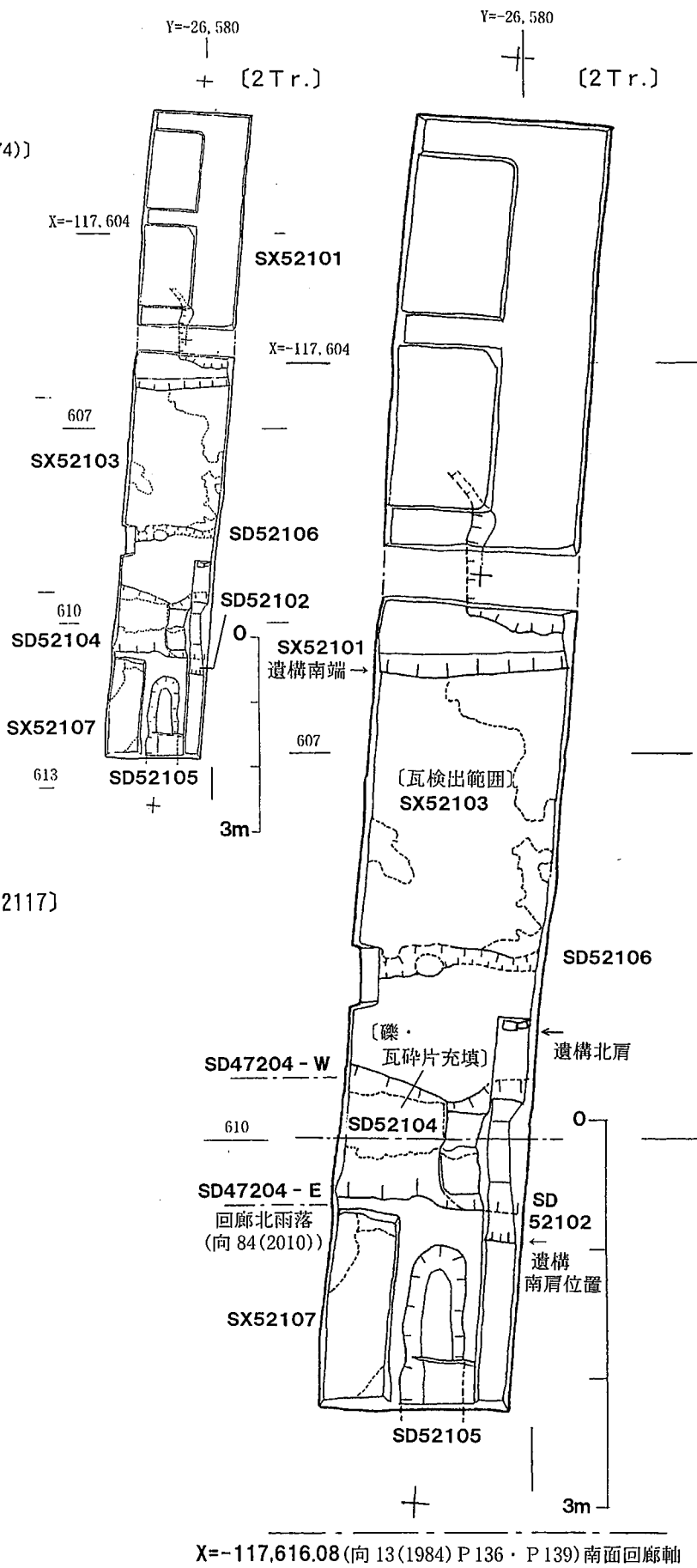
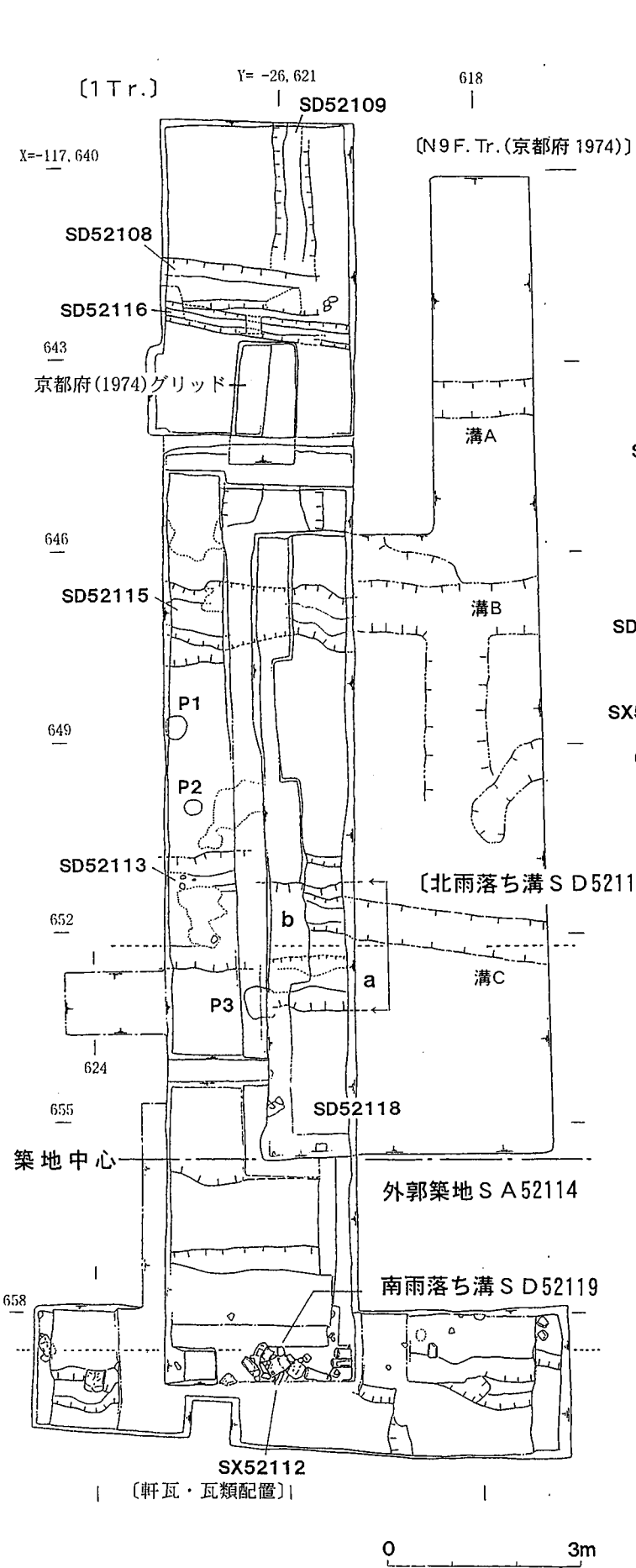


図4 後期平城宮の構造と内裏内郭・外郭の範囲 (奈良文化財研究所2008)

※後期 (745~784年)



(a) 第1トレンチ (S=1:100)

(b) 第2トレンチ (S=1:100・1:50)

図5 遺構平面図

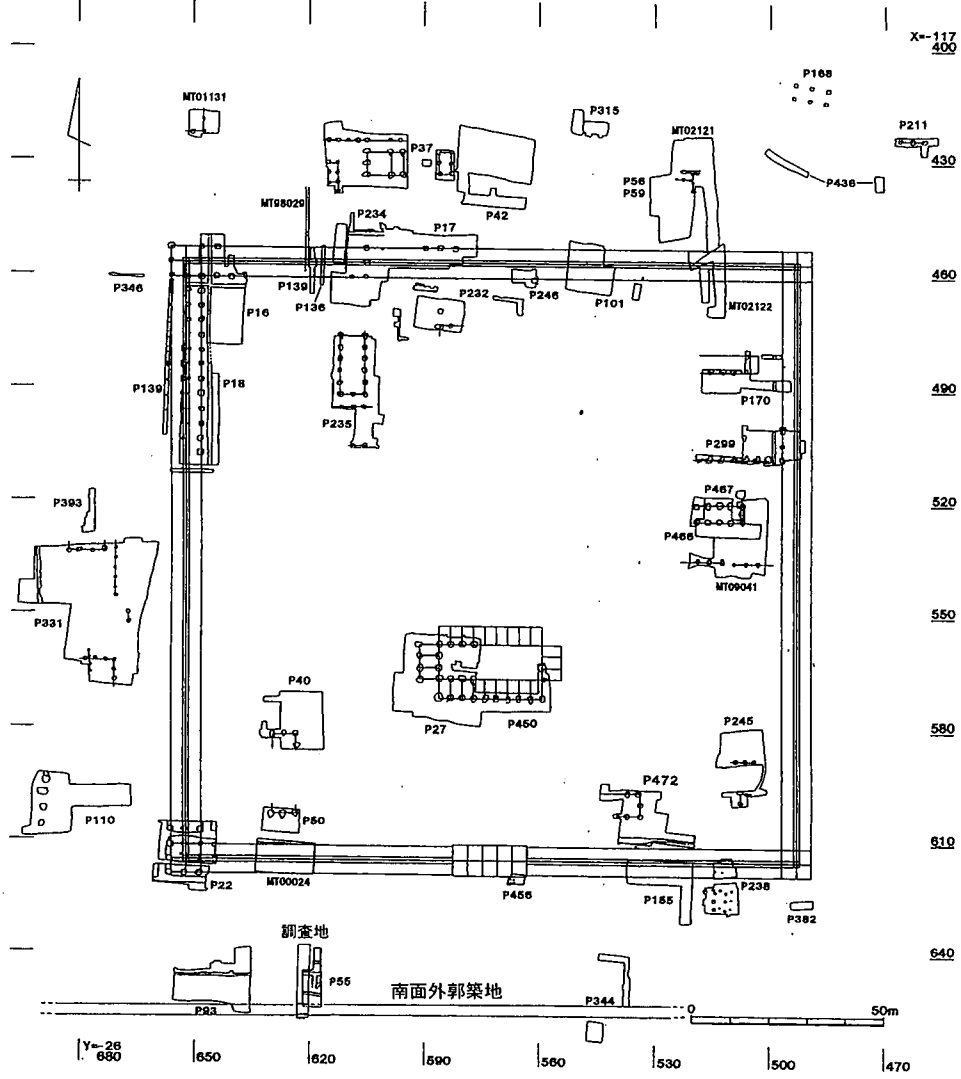


図6 長岡宮「東宮」復原図

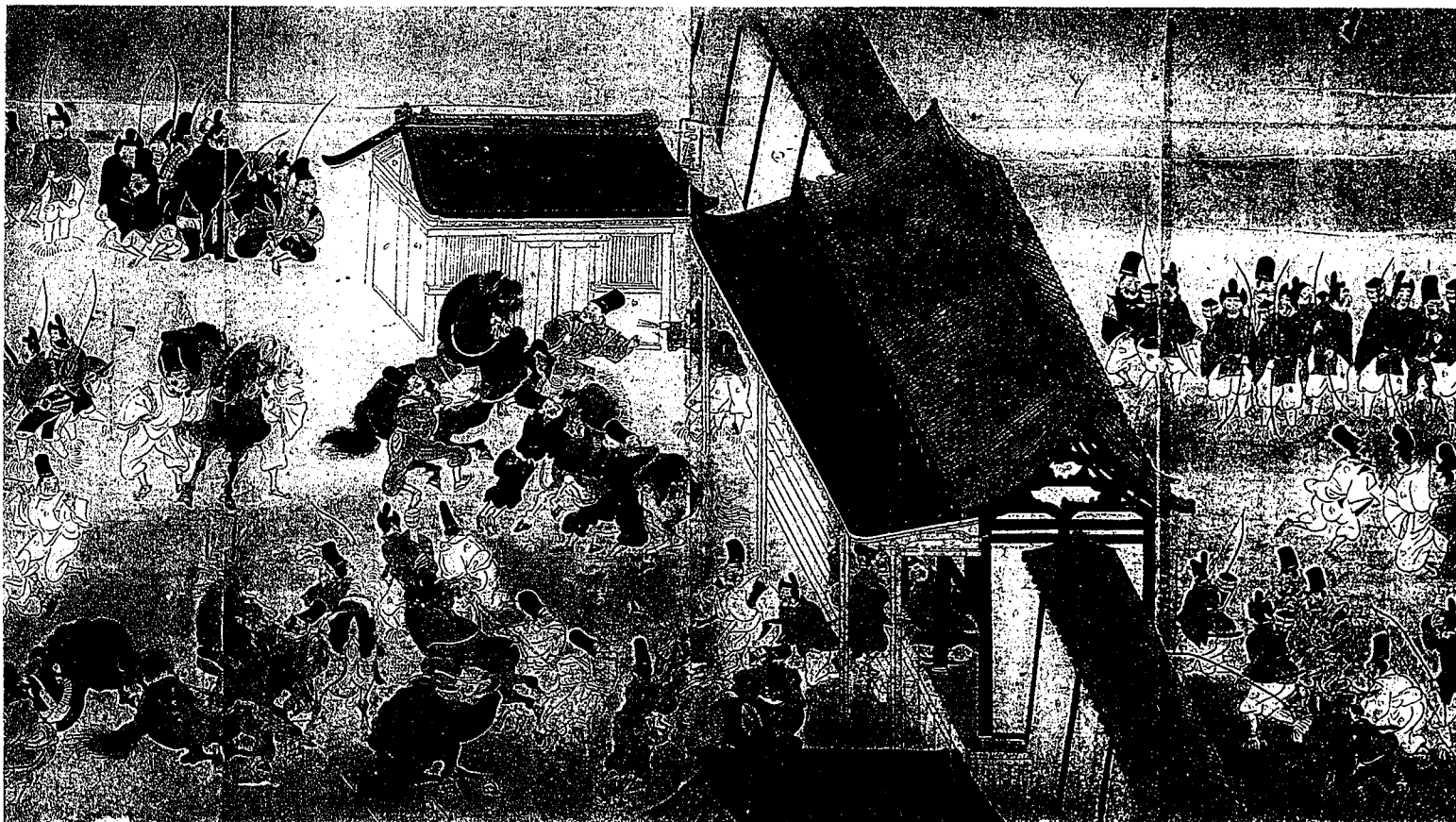


図7 『年中行事絵巻』にみる内裏外郭南面築地と建礼門 (中央公論社 1977)